

# 京都市政史編さん通信

第 40 号  
2011 年 3 月

## 児童公園・児童館・ちびっこひろば（下）

森川 正則

### 四、富井市政期までの施策の継承・発展へ

一九七一年（昭和四六）二月の市長選の結果、船橋求己が当選を果たして市長となった。船橋は、富井前市長の下で助役を務めていたこともあり、「子どもを大切にする市政」を受け継いでいく。

船橋市長は、就任の翌月の定例会市会で、住民運動としてのちびっこひろばづくりをさらに発展させるべく、ひろばの整備を引き続き進めることが大切であると述べている。また、京都市児童館条例の改正案と京都市都市公園条例の改正案が提出・可決された。前者は新道児童館（東山区小松町・建仁寺境内）と洛陽児童館（南区吉祥院西定成町）を第一種児童館として新設し、後者は糠田児童公園（北区上賀茂糠田町〔現・桜井町〕）ほか一六の公園を造ることを目的としていた。<sup>1</sup>

さらに、この時の市会では、井上茂八郎議員（日本社会党）が新たな施策として、次のような質問・提案を投げかけている。井上議員によれば、河川の汚濁などで六歳以下の子どもたちが安心して水に親しめる場がない。そこで、ちびっこひろばに続いて、子どもが安心して水に親しめるちびっこプールづくりに取り組んではどうかと問うた。この時、船橋市長は「真剣に取り組んでまいりたい」と答えている。<sup>2</sup>

実際、ちびっこプール（じゃぶじゃぶプール）は、翌年七月から設置が始まる。この幼児用のプールは、縦五m・横三m・深さ二五cmのコンクリート製で、各区の児童公園二か所ずつに計一八のプールが造られることになった。<sup>3</sup> 例えば、七月二〇日にオープンした南田児童公園

### 目次

森川正則「児童公園・児童館・ちびっこひろば（下）」	1
小堀利行「したたかさと幸運、京都であるという矜持」	5
歴史資料館だより	7
京わらべ	8

（左京区浄土寺南田町）のプールでは、幼児と母親たち約三百人が集まり、記念セレモニーが催された。船橋市長も出席して、幼児の代表と一緒にプール開きのテープカットを行った。この時、幼児の代表から花束を贈られた船橋市長は挨拶の中で、来年はプールをもっと増やしたいと述べている。<sup>4</sup> ちびっこプールは大好評だったようで、子どもへの保護者たちからも増設を求める声が寄せられた。そこで一九七三年七月にはさらに一八か所を増設し、各区に四か所ずつ計三六か所になった。<sup>5</sup> こうして、船橋市政の下では新規の施策も織り交ぜつつ、富井市政期までの施策が継承されていった。施設数を見ると、ちびっこひろばは一九七三年度末時点で四五四か所、児童館は一五館（第一種が八館で第二種が七館）となっていた。<sup>6</sup> また、児童公園は一九七四年四月現在で二八二か所（代用公園八か所を含む）であった。この頃、市では一九七二年度を初年度とする「都市公園整備五か年計画」の下で一〇〇か所の新設を目指していた。<sup>7</sup> 実際、船橋市政期（一九七二～八一年）を通じて、児童公園の数は大きく伸び続けている。

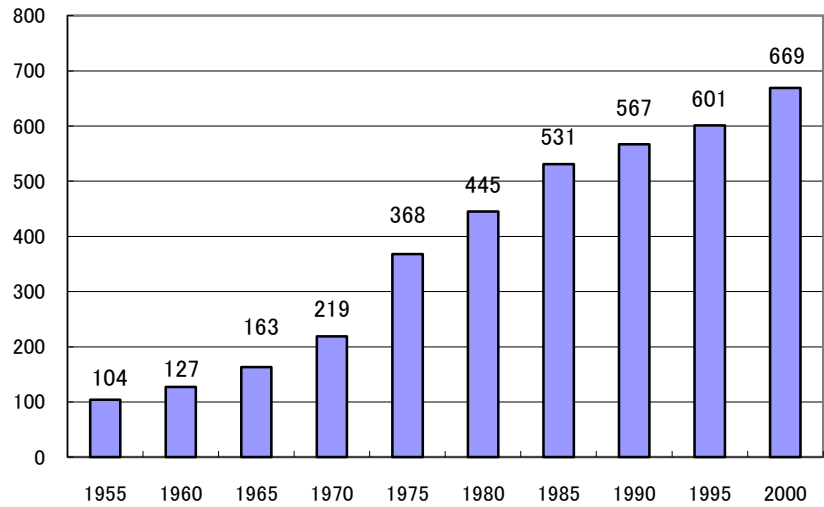
さらに、子どもの育成と遊び場に関する施策は、船橋市政の福祉政策全体の中に位置づけられることになった。一九七四年八月、各種の市民団体の代表者が参加する形で、市民の健康と福祉に関する計画委員会が設置された。<sup>8</sup> 同委員会は二年後の一九七六年七月、「市民の健康と福祉に関する総合政策体系のあり方」（以下、「体系」と略記）と題する答申を船橋市長に提出した。この答申は市民の全生涯を、胎児期・乳幼児期（〇～六歳）・少年少女期（七～一五歳）・青年期（一六～二二歳）・壮年期（二三～五九歳）・老年期（六〇歳以上）に区切りながら、時期ごとに施策をとりまとめたものである。

乳幼児期については、「乳幼児の正しい発達を保障するために、そのために社会的に保障することが強く要請されている」とし、「そのて

だては、あたらしい地域社会づくりの一環として、用意されるべきである」と提言した。用意されるべき施策の中に含まれているのが、児童公園・児童館・ちびっこひろばである。「体系」は児童公園について、児童の健全な発達を保障するための場として欠くことのできない公的施設であり、積極的に増やしていくために市民の協力を得て用地確保に努めるべきだとしている。<sup>9</sup>

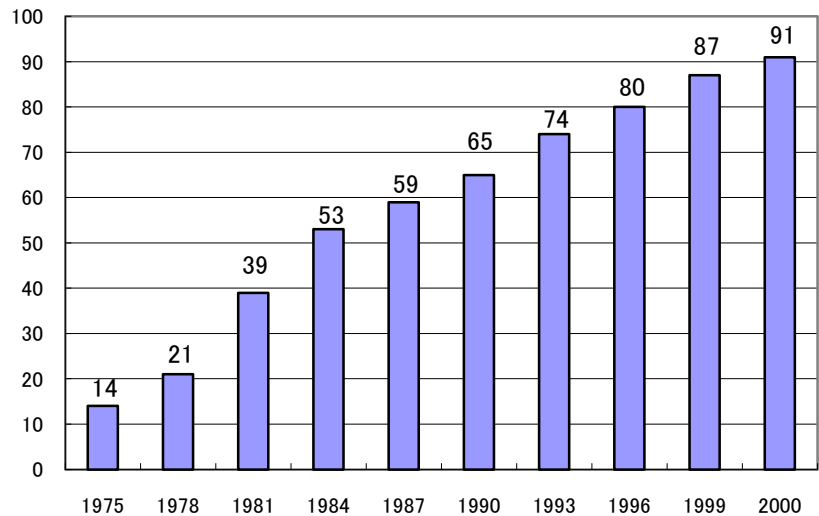
また、「体系」において一層重視されるようになったと思われるのが児童館である。というのは、子どもの屋内の遊び場に止まらない積極的な役割を児童館に与える内容となっているからである。「体系」では、

児童公園(街区公園)数の推移



(注)1955・60年は、京都市建設局公園緑地課『京都市の公園』(1955年1月調)・『京都市の公園』(1960年4月1日現在)、1965年以降(年度末時点の数で代用公園も含む)は『京都市統計書』を参照して作成。

児童館数の推移



(注)『京都市事務報告書』を参照して作成。

<sup>10</sup> 「体系」を踏まえて、船橋市政は、今まで以上に既存の施策の継承・発展へと歩を進めていったのである。

しかし、施策だけではなくて、以前からの課題もなかなか解消されずに引き継がれていたことにも目を向けなければならぬ。そもそも、船橋市政下で児童公園の増設が精力的に進められたのは、子どもの遊び場が依然として足りていなかったからである。『京都の都市計画』一九七四年版は、空き地の減少とモータリゼーションの激化によって、子どもたちの遊び場は少ないと記していた。また、新市街地よりも旧市街地ほど公園の数が少ない上に、地価が高くて公園の新設が困難であるという<sup>11</sup>。ここで指摘されていることは、高山市政期の一九六〇年代初めの頃

児童館を児童の発達を保障するためのコミュニケーション機能として捉え、地域における子ども会やグループ活動などの拠点として機能させる必要を述べている。また、他の児童福祉施設を児童館の一機能として統合して、施設相互の相乗効果を高め児童館事業の拡充をはかることが提起された。ここで他の施設として挙げられているのは学童保育所である。これは、いわゆる鍵っ子対策として、高山市政期の一九六五年四月から始まった保育事業施設であった。

一九七七年七月、船橋市長は、学童保育所を併設した児童館の増設を行うと述べ、学童保育機能も有する児童館(一元化児童館)の設置に乗り出していく。

から直面していた課題に他ならない。

増設という以上に難題であり続けたのは、施設の維持・管理であった。例えば、一九七七年二月の第七回定例会市会で、山下良博議員（公明党）が児童公園について次のような指摘・質問をしている。児童公園の遊具などはよく壊され、便所や水道栓にいたずらをしたり、砂場の砂を盗んだりする不心得者がある。現在、児童公園の維持補修は、船岡山公園と円山公園に置かれている二か所の公園管理事務所で行っているが、<sup>12</sup>これでは見回りも満足に出来ないのではないかと言う。時の森田長雄建設局長は、管理の内容として清掃・除草・遊具の修理、そして不正使用の取締があると述べる。清掃・除草などについては公園を利用する地域住民にできるだけ協力をお願いして、それで足らないところを市で行うというのが方針であった。そのため、市では児童公園がある地元に対して、公園愛護会の設立を呼びかけているとのことであった。<sup>13</sup>

維持・管理の難しさという点では、ちびっこひろばについても同様である。ひろばの数は一九七一年の四七一をピークにして、その後は減少しており、一九七六年には四四八となっていた。<sup>14</sup>ひろばづくりが始まって一〇年目にあたる一九七六年七月から、市では「ちびっこひろば助成要綱」を改正し、新設よりも管理に重きを置く方針を採っていく。時が経つにつれ、遊具が傷んだまま放置され、荒れたままになっているひろばが多く目につくようになったからである。そこで改正要綱では、あくまで住民主体の設置・管理を前提として市が後押しすることを強調した上で、ひろばへの助成方針を改めた。従来の助成対象は面積一〇平方m以上・一年以上無償で使用できる土地であったが、面積三〇平方m以上・三年以上無償で使用できる土地とした。さらに、地元でひろばを適正に維持・管理し得なくなったり、利用者がいなくなったりした場合には、市側は助成を停止することにしたのである。<sup>15</sup>

## おわりに

この小論では、子どもの遊び場の設置・充実をめぐる施策の展開について、市民との関係を視野に入れながら、高山市政期から船橋市政期までを対象時期として論じた。そこで、本稿の内容を改めてまとめておきたい。

敗戦間もない頃から、子どもの遊び場として整備が行われたのは、児

童公園である。この施設は戦前から設置されていたが、戦後の児童公園の整備にあたっては公園の新設に加えて、荒れ果てていた既存の公園の再整備も必要であった。しかし、京都市は、高山市政期の一九五六年（昭和三一）に財政再建団体に指定にされるという深刻な財政危機に陥ってしまう。厳しい財政事情は、新規の公園建設と既存公園の整備を共にやっていく上での大きな制約となった。それでも、児童公園の整備は少しづつながら進められ、公園数も増えていった。

高山市政期においては、古電車を改装・利用した電車児童館が設置されたことも見逃せない。電車児童館は各行政区に一か所ずつ設置された。富井市政は、児童館を第一種と第二種に分けつつ、事業の充実を目指した。さらに船橋市政期の後半になると、第一種児童館については、子どもの屋内遊び場に止まらぬ広範な役割が与えられていくことになった。

児童公園と児童館の他に、富井市政期に新しく登場したのが、ちびっこひろばという幼児用の遊び場である。これは、高山市政期に児童公園の一部を仕切って設けた幼児公園に代わる施策でもあった。ちびっこひろば運動は、その設置と管理の両面において、地域住民の積極的な協力を得ながら活発に行われた。本稿ではこの点について、ちびっこひろば運動の地下は高山市政期に見出すことができるのではないかと捉えた。なぜなら、市と地域住民の協力は、児童公園の愛護・管理に努める中で、すでに高山市政期に芽生えていたからである。高山市政については、その政治的支持基盤に目を向けるなら、「革新」から「保守」への変容が描かれる。<sup>16</sup>ただし、本稿で論じた子どもの遊び場をめぐる施策と市民との関係に即して言えば、「保守」の高山市政と「革新」の富井・船橋市政との間では、共通性や継承の側面も浮かび上がってくるのである。さて最後に、一九八〇年代以降の動きについて簡単に触れながら、本稿を締めくくりにしたい。

一九八五年五月、今川正彦市長の下で、「京都市基本計画」が策定された。この計画の中では、学童保育の機能を持つ児童館の整備など、地域における子どもの育成のための施設の拡充を図るとしていた。また、遊びの空間を拡充するため、児童公園やちびっこひろばの整備を掲げた。

<sup>17</sup>その後、一九九三年（平成五）三月に田邊朋之市長の下で策定され



写真「ちびっこプール 水深 25 cm の幼児専用プールです。児童公園などに合計 75 か所にふえました。安全と衛生のために、地元の方にお世話をお願いしています。」

(『市民のまち京都』京都市広報課、1978 年 10 月、99 頁)

た「京都市基本計画」にも同様の方針が記されている。<sup>18</sup>  
 しかし、本稿で主に取り上げた三つの施設のうち、拡充とは逆に廃止が多くなったのが、ちびっこひろばである。ひろばの数は一九八九年末で三七〇、二年後の一九九一年度末には三六一に減っていた。<sup>19</sup> 設置数が最も多かった一九七一年から二〇〇年が経過して、一〇〇か所以上のひろばが姿を消したのである。また、ひろばの中には、敷地内に雑草が生い茂り、壊れた傘や段ボール箱などが散乱して荒れ果てた状態の所もあった。地元管理者の話によれば、ひろばの利用者である子どもが減ってしまった、近寄る者もいなくなってしまうという。<sup>20</sup>  
 ちびっこひろばの場合、地元住民が設置・管理の主体となり、その上で市が必要な助成を行うという方式であったことから、ひろばの存続は何よりも地元住民の手にかかっていた。しかし、利用者である子どもも自体が少なくなる中では、ひろばの管理の継続は地元住民にとって大きな負担になっていったと考えられる。かつて、ひろばづくりが盛んに行わ

れた頃とは違い、少子社会化の進行をうけて、ひろばの存在意義は次第に薄れ、廃止や荒廃が進んでいったと言えよう。  
 ちびっこひろばの見直しが本格的に始まるのは、一九九六年二月に就任した榎本頼兼市長の時代で、子どもの遊び場にとどまらない「地域コミュニティひろば」としての再生が模索されることになった。<sup>21</sup> 加えて、榎本市政期の行財政改革の過程では、本稿で取り上げた他の施設が整理・廃止の対象となっていく。一つは、第二種児童館、すなわち古電車を利用した児童館である。第一種児童館は子どもの健全育成と子育て支援の拠点として位置づけられる一方で、第二種児童館の役割は終わったとされ、事業廃止となるに至った。もう一つは、ちびっこプールで



写真 西京区椋原五反田に残されている古電車  
 (2011 年 2 月 26 日、著者撮影)

ある。一九九八年当時、市内九一か所にあったプールのうち、利用者の少ない所については整理・統合を進めることにした。<sup>22</sup> その後、二〇〇四年度をもって事業自体を廃止するとともに、プールの跡地については翌年度から再整備していく方針が採られていく。<sup>23</sup> こうして、子どもの育成と遊び場に関わる施策は、榎本市政の下で大きな変化を遂げることになったのである。

## 註

<sup>1</sup> 『昭和四十六年第一回(定例会)京都市議会会議録』二五・七八・一一五頁。  
 同右、七一・七八頁。

- 3 『京都新聞』一九七二年五月八日、京都市庁内誌『ひろば』No.1111(一九七二年七月)。
- 4 『京都新聞』一九七二年七月二日。
- 5 京都市庁内誌『ひろば』No.1123(一九七三年七月)、『市民しんぶん』第二二三号(一九七三年七月)。
- 6 『市政のあらまし 昭和四九年度』(京都市会事務局)五一〜五二頁。
- 7 『建設局事務概要』(京都市、一九七四年度)四一・四三頁。
- 8 京都市市政史編さん委員会編『京都市政史 第五巻 資料 市政の展開』(京都市、二〇〇六年)七四〜七五頁。
- 9 『市民の健康と福祉に関する総合政策体系のあり方』(京都市、一九七六年七月)五六・六〇頁。
- 10 京都市児童福祉史研究会編『京都市児童福祉百年史』(京都市児童福祉センター、一九九〇年)一九九頁。
- 11 『京都の都市計画―昭和四九年版』(京都市都市計画局土地利用対策室・計画調整課、一九七四年三月)八二頁。
- 12 この二か所の公園管理事務所は、一九七四年四月の市役所組織改正によって設置され、公園の効果的な維持・管理を図ることになった(京都市庁内誌『ひろば』No.1133、一九七四年五月)。
- 13 『昭和五二年第七回(定例会) 京都市議会会議録』六七・八一頁。
- 14 拙稿「児童公園・児童館・ちびっこひろば(上)」(『京都市政史編さん通信』第三九号、二〇一〇年一月)四頁。

## したたかさと幸運、京都であるという矜持

京都市立病院事務局医事課 小堀利行

私は京都市中京区の朱雀第八学区で生まれ育った。幼い頃の記憶(昭和三〇年代後半)では、中京区の西の端は、現在とは風景が違い、郊外の趣があった。家の近くには田・畑や「ひろっぱ」、所謂ひろば(島津製作所が所有する住宅の跡地)があり、子供の遊び場であり探検場所であった。そこは春には名も知らない野草(雑草)の花が咲き、夏には蝶やバッタで虫籠がいっぱいになり、秋には赤とんぼが群れて飛び、冬には荒涼とした立ち枯れた雑草の野原の風景があった。天神川(紙屋川)

- 15 『京都新聞』一九七六年六月三〇日。
- 16 三宅一郎・村松岐夫編『京都市政治の動態』(有斐閣、一九八一年)第二章「京都市の戦後政治序説」(山口定執筆)を参照。
- 17 『京都市基本計画のあらまし』(京都市、一九八五年)一一・四五頁。
- 18 『新京都市基本計画 平成の京づくり―文化首都の中核をめざして』(京都市企画局活性化推進室計画課、一九九三年三月)五〇・六七頁。
- 19 『平成二年京都市事務報告書』三六頁、『平成四年京都市事務報告書』三七頁。
- 20 『京都新聞』一九九二年一月八日夕刊。
- 21 『第一次・京都新世紀に向けた市政改革行動計画 推進計画』(京都市、一九九八年一月)三七頁。一九九八年二月には西京区の松尾小学校で、地元のちびっこひろばの再生を考えるワークショップが開かれている(『京都新聞』一九九八年二月二五日)。なお、地域コミュニティひろばの整備事業について、ひろばのデザインに注目して論じたものとして、佐藤正吾・吉田鐵也「小広場整備における管理運営への住民の意向とデザインの関係についての考察―京都市コミュニティひろば整備事業を事例として」(日本建築学会『學術講演梗概集F-1 都市計画 建築経済・住宅問題』二〇〇〇年七月)を参照。
- 22 同右『第一次・京都新世紀に向けた市政改革行動計画 推進計画』一〇頁。
- 23 『京都新聞』二〇〇四年二月二四日、『京都市議会 第四回建設消防委員会記録 平成一六年五月二一日 開会』(京都市会図書館蔵)六〇頁。

は上流の染色工場の影響か、水が赤茶色に染まっており、壺井橋は木造だった。入学した朱雀第八小学校は木造校舎で廊下は油引きであり、給食には脱脂粉乳が出ており、小学校の北側を走る山陰本線は単線で蒸気機関車がまだまだ活躍していた。

『京都市政史 第一巻 市政の形成』(以下、本書という)によると中京区の朱雀第八学区は、明治維新後は、葛野郡朱雀野村に属し、一九一八年(大正七年)に京都市に合併した。天神川(紙屋川)は一九一九年(大正八年)の地図には存在していない。丸太町付近で途切れていたらしい。室戸台風の水害を受けて一九三七年(昭和十二年)から御室川との合流工事が行われたようだ。

この度、本書を通読して、興味を持って楽しめた箇所は、第一部市政の揺籃(ようらん)第一章明治維新期、第二章市政誕生期、そして第

部市政の定着と停滞第三章戦時体制期だった。日本の大きな歴史の転換期に巻き込まれ、都市として衰退、再生、復興し、再び衰退していくまでのサイクル（一八六八年（明治元年）から一九四五年（昭和二〇年））の始めと終わり部分は、歴史上で激動する時期の良くも悪くもダイナミックに変化していく市政を知ることができる。

本書は、未だ市政が始まっていない明治維新から始まっている。明治維新こそが、その後の京都市の都市としての再興を行っていくうえでの最大の要因になるからだ。天皇が東京に行幸されたまま戻ってこられない。そのまま「東京遷都」となってしまう。京都は千年もの間、天皇を中心に公家が朝廷を形成し、そこに寺院・神社が取り巻いて権威が成り立ち、そこに産業や経済等すべてがぶらさがることで都市が形成されていた。維新後、寺院や神社は過去の権利を失う。京都にとつてのすべての支柱であった天皇まで「遷都」してしまい、一緒に公家・商工業者たちも東京に移住する。都市を形成していた要素をほぼ失ってしまったのだから、残された人々の暗澹たる思いは如何ばかりであったかは想像できない。また実際に江戸時代には三〇万以上あった人口が、明治四年には二三万人台に減少し、都市は衰微し始める。

この状況を打開するにはやはり資金が必要で、それを有効に運用する人物が必要になる。また、それにも増して、京都である誇りをエネルギーに換え再興を実践する人物が求められていた。

京都も文明開化、殖産興業などの政策を推進しなければならぬが、幕末の尊王攘夷の思想の影響で外国を忌避する市民や、「東京遷都」で反発する人々も数多くいて抗議行動もおこった。そのため政府は産業振興のための一〇万両の下賜金（産業基金）と一五万両の貸付金（勸業基金）を下付した。また、京都府は東京府と並ぶ重要府県と位置付ける。つまり、京都は幕末の倒幕時に培った人脈を政府との強いパイプとし、それをしたたかに生かし、政府とかけひきしつつ維新後の荒廃から都市再生を目指したのだ。

第三代京都府知事北垣国道は琵琶湖疏水の工事を一八九〇年（明治二三年）に完成させたが、産業基金は莫大な工事費用（約一二五万円）の主要な資金となっている。疏水が京都市の水道、発電、市街電車によ

る交通という都市基盤の礎になったことは周知のことである。

組織上「京都市」は一八八九年（明治二二年）にできる。しかし市制特例により東京、京都、大阪の三市は、府知事が市長を兼務することになっていった。

一八八八年（明治三一年）になり市制特例が廃止され京都市が独自に市長を選ぶことが可能になり、初代市長には地元の名望家である内貴甚三郎が任命される。内貴市長は地域の四方への拡張と下水道敷設を行い、世界につながる日本の中心に位置する、産業が盛んで清潔な人口五〇万人都市を目指した。第二代市長は一九〇四年（明治三七年）に内務官僚で西郷隆盛の最初の子である西郷菊次郎が任命される。西郷市長は第二琵琶湖疏水、上水道の整備、道路拡張という「三大事業」を収益性の観点から企画し、フランスでの外債募集で四五〇〇万フランの募債を成功させ、事業をスタートさせる。

その後も京都市は市長を選ぶ際に、政府とのパイプを持つ有力な人物を重視している。また、相当の厚遇をもって迎えている。

京都市は紆余曲折もあったが、都市基盤を整備しながら、近郊の市町村を合併して市域を拡張し、伝統産業の工業化を成功させ、観光行政を展開・充実させ観光都市化を図っていき、一九三一年（昭和六年）には京都市の人口は一〇〇万人を超えていくことになる。

しかし、戦争はすべてを変容させる。同年九月に柳条湖事件がおこり、満州事変が始まり、翌年、満州国が樹立される。徐々にではあるが時代は戦時体制に向けて突き進み、日本は国際的孤立を深めていく。一九三七年（昭和十二年）七月、盧溝橋事件がおこり日中戦争は全面化し、労働力、物資、出版など国民生活全般にわたって統制する国家総動員法が一九三八年に制定され、政府は徐々に戦争遂行に予算や資材を振り向けるため、地方に事業を緊縮していく。こうした中でも国民は国威発揚と関連した戦勝祝賀の夜間提灯行列を娯楽としたりしていた。また一九四〇年（昭和十五年）に政府は国威発揚をめざし、「紀元二千六百年」を祝賀する行事を行う。京都市はそれを利用して、桃山御陵など、京都の「聖地参拝」をスローガンに観光の維持を図り、不振であった観光客を一時的に増やしている。

余談になるが、「紀元二千六百年」といえば、私が小学五年生のとき、朱雀第八小学校で長年使用されてない教室の掃除をしていたとき、古新聞に、「紀元二千六百年記念日本万国博覧會」と右から左に横書きされた富士山と鳥の図案が載った新聞広告を発見し、友人と珍しがっていたことを覚えてる。これは東京市晴海で一九四〇年（昭和十五年）に開催を予定していたが行われなかった。

京都市政は戦時体制の統制の中に組み込まれる。一九四一年（昭和十六年）の太平洋戦争勃発以降、市役所は市政の重点を防衛・配給・保健の三点に絞られ、臨戦態勢を強いられる。区役所の業務は、物資の配給、金属類回収（供出）、防空訓練、徴兵業務など軍事色の強いものになっていく。戦争に応召する市職員も増加し、人手不足を補うために高齢職員の活用と女子職員の採用が行われる。

注目すべきは、日本の国際的孤立の中で、京都市は、東亜大都市連盟会議（懇談会）で日本文化を代表する都市として同会議で存在感を發揮することを期待され、参加した市長は演説を行っている。その後もアジアから多くの訪問・視察者を受入れ、戦争遂行にあたっての精神的支柱のような位置が与えられていたことである。交戦国アメリカ合衆国もその役割に注目し、原子爆弾の投下目標都市の第一候補に選んでいる。日本人にとって宗教的な意義を持った重要都市であり、ここを破壊すれば日本人に非常に大きな心理的ショックを与えることができ、その抗戦への意欲を失わせるのに役立つという理由である。だからこそ選ばれながら、戦後の統治を見越して投下を見送られた。原爆の第一標的にされながら、京都ゆえに回避されるなんていう重い幸運：

話しは戻るが、維新後、武家は地位を失い、公家の多くは東京に移住し、新しい京都の担い手は商工業者である京都市民に委ねられていた。中でも資産や名望のある人材は大年寄として民政の安定を図った。一八六九年（明治二年）に新しく大年寄に任じられたのは寺町の鳩居堂主人の熊谷直孝らで、最初の大きな仕事は「東京遷都」により遷都に動揺する市民の心情を抑えそのエネルギーを新しい町づくりに向けてることであり、動揺する市民を代表して政府に京都に対する特別な支援策を求めた。前述した産業基金と勸業基金はその求めに応じて政府の行った支援

策の一つあり、これらの資金は琵琶湖疏水、小学校の設立等に活用されている。彼らはその文書の中でみずから京都の自治を担う中心人物として「市長」と述べている。その気概と矜持こそが京都を再生するための原動力となり、市政と協力し、あるときは対立しながらも、現在の京都の基を築き上げたのだと考える。

このあたりことは、歴史資料館で本書作成の事務局をされていた小林丈広さんの『明治維新と京都—公家社会の解体』（臨川書店）に詳しく記述されているので、興味のある方は参照されたい。

最後に、本書は七〇〇ページみっちりあるが、写真・表・図も豊富でありコラムまで掲載されているので飽きない。普通に通読すると、基本的な事柄がテーマ別に重複して記述されているため読みにくいと感じる。テーマ別に通読するほうが読みやすい。是非「本書の読み方」（一一ページ）の記述を読む前に参照されたい。市職員にとって得がたい参考書になる。また、冒頭に記したように個人の生活や仕事での記憶をたどりながら、この土地や施設が京都市政でどのような歴史を持ち、役割を果たしてきたかを徒然に調べていくのも面白いかもしれない。

### 歴史資料館だより

☆ このところ、事務局の動きをお伝えできていませんでしたので、ここで二〇〇九年度後半以降の活動をご報告します。

・二〇〇九年一月九日（水）、展開期編集委員打合せ。  
・二〇一〇年一月九日（土）、市政史研究会（展開期叙述編、二〇〇九年度第五回）。中森孝文・徳久恭子各氏の報告。執筆分担と今後のスケジュールなど。

・二〇一〇年二月三日（水）、拡大事務局会議。  
・二〇一〇年二月一日（水）、市政史編さん委員会（第四九回）。  
・二〇一〇年三月二四日（水）、市政史研究会（展開期叙述編、二〇〇九年度第六回）。秋月謙吾・芦立秀朗・大西裕・風間規男・北村亘・佐藤満・曾我謙悟・田尾雅夫・徳久恭子・中森孝文・松並潤・森裕城各氏のご報告。

・二〇一〇年四月七日（水）、拡大事務局会議。

- ・二〇一〇年四月一五日(水)、市政史編さん委員会(第五〇回)。同日、市政史編集・顧問会議(第二一回)。
- ・二〇一〇年四月二四日(土)、市政史研究会(展開期叙述編、二〇一〇年度第一回)。石見豊・南京兌・広本政幸各氏の報告。
- ・二〇一〇年十一月七日(日)、市政史研究会(展開期叙述編、二〇一〇年度第二回)。秋月謙吾・石見豊・大西裕・北村亘・佐藤満・曾我謙悟・田尾雅夫・徳久恭子・中森孝文・南京兌・広本政幸・松並潤・森裕城各氏の報告。

- ・二〇一〇年十一月一七日(水)、拡大事務局会議。
- ・二〇一〇年十一月二四日(水)、市政史編さん委員会(第五一回)。
- ・二〇一一年一月二日(水)、展開期編集委員などの打合せ。

### 京わらべ

◇ 二〇〇七年度以降の事務局の異動をご報告させていただきます。二〇〇七年四月、事務職として経理を担当していた安田久仁広が伏見区役所納税課担当係長に昇進して転出、五月一日より新たに伊藤浩二主任が着任。二〇〇九年三月に嘱託の田中寛子が退職し、四月に嘱託の山岸弓子が着任。二〇一〇年三月に北本勤課長補佐の退職にともない、四月より新たに上田光彦担当係長が着任しました。

また、二〇一〇年六月から市政史編さん助手をつとめた入山洋子が、二〇〇八年三月に退職し、新たに佐竹朋子が四月一日付で採用。また、二〇〇九年三月に市政史編さん助手の福家崇弘・佐竹朋子が退職し、四月一日付で新たに奈良勝司・齊藤紅葉が市政史編さん助手に採用。同年七月三十一日付で奈良勝司が退職し、八月一日付で川口朋子が市政史編さん助手として採用されました。

◇ 今回は、森川論文の後編と、市立病院医事課の小堀利行氏による『京都市政史 第1巻 市政の形成』の書評を掲載できました。年度末のお忙しい中、ご寄稿くださいますと、ありがとうございます。

た。(秋)

発行日 二〇一一年三月二〇日  
 発行 京都市市政史編さん委員会  
 所在地 京都市上京区寺町通丸太町上る  
 京都市歴史資料館内  
 電話 〇七五(二四一)四三二二

# 京都市政史 全5巻

発行 京都市  
 編集 京都市市政史編さん委員会

## 第1巻 市政の形成 (第3回配本)

二〇〇九年三月発行/A5判/約八〇〇頁/口絵・解説付

定価 六〇〇〇円(税込)

### 〔本巻編集委員〕

伊藤之雄(代表)・松下孝昭

〔本巻執筆者〕 秋元せき・伊藤之雄・井上幸治・小林丈広・佐藤満・鈴木栄樹・奈良岡聰智・西山伸・福家崇洋・松下孝昭・松中博

### 〔本巻の特色〕

- ◇ 都市改造・近代自治・文化・観光など明治維新から一九五〇年までの京都市の都市再生をめぐるドラマを描く。
- ◇ 市政史にとどまらない京都の社会や経済、文化の変化までも描きだすきめ細かな章立てを設定。
- ◇ 京都市の行政資料をはじめ新出の政治家書簡や日記・新聞など多様な資料群から新事実を多数掲載。
- ◇ 読みやすい文章と豊富な図版によって幅広い読者に配慮しただけでなく、近代日本の都市史研究にも一石を投じる内容。

● お問い合わせはこちらまで

京都市歴史資料館  
 〒602 0867 京都市上京区寺町通丸太町上る  
 電話番号 075(241)4312